

佳作

「まじはすじい」

千葉県

山武市立緑海小学校 三年

いとう まさや

まいは、すごい。

ぼくがやりたくてもできないことを、へいきでやってしまう。

夏休みに「オニヤンマをおいかけよう」の教室にさんかした時、先生が、

「シオカラトンボは、なめるとしょっぱい味がするから、その名前がついたというせつもあるんだよ。」

と、教えてくれた。ぼくは、たしかめてみたくなった。つかまえたシオカラトンボを、手にとり、顔を近づけた。

「やっぱり、むり。きもちわるい。」

ぼくは、つぶやいた。

すると、まいが

「お兄ちゃん、まいがなめてあげる。」

と、ぼくの手から、シオカラトンボをとった。

「なにも味がしないよ。」

と、言つて、なめてしまった。

「やっぱり、なにも味がしない。」

体のいろいろな所を、なめていた。

すごい、すごい。ぼくには、できない。

でも、なめてくれてありがとう、まい。

ぼくは、スイミングの練習しゅう中に、足のゆびをけがしてしまった。病院のしんさつ室から出てくると、まいが、目になみだをためてまっていた。

「お兄ちゃん、だいじょうぶ。いたくない。」

と、言つて、ぼくの体をささえてくれた。ぼくより、四つも年下の小さな体で、ぼくの体を、いっしょうけんめいささえてくれた。こんどは、うれしくてぼくの目に、なみだがたまった。

心配してくれて、ありがとう、まい。

まいは、

「お兄ちゃん、どつしたの。」

「お兄ちゃん、どこ行くの。」

「お兄ちゃん、あそぼっ。」

いつもぼくのあとをついてくる。いつもぼくのまねをする。

まいは、毎日のように

「お兄ちゃん、大すき。」

と、言つてくれる。ぼくは、

「まい、大すき。」

と、声にだして言ったことは、ないけれど、本当は、大すきだよ。

第1回 いつもありがとう作文コンクール

「まい、いつもそばにいてくれて、ありがとう。大すぎだよ。」
と、声に出して言ってみようかな。でも、ちよっぴりはずかしい。
たまには、けんかもするけれど、ぼくたちは、とてもなかよし。いつでも、ぼくとまい
は、いっしょ。

まいは、ぼくの世かいで一番だいじなたから物。
いつもありがとう。ぼくの妹、まい。